

特集「ネットワークで世界を描く」

佐藤俊樹

ネットワークは不思議な言葉だ。いや正直に言い直そう。「ネットワーク」という言葉を使うとき、私はいつも小さな戸惑いとためらいを感じてしまう。そんな言葉だ。

いうまでもなく、全ての人にとってそうではないだろう。例えば通信や伝送の物理的な回路をあつかう人たちにとって、ネットワークは文字通り、そういうモノとして存在する。そうした人たちにとって、ネットワークはネットワークで、それ以上でもそれ以下でもない。

けれども、そうでない人たちの多くにとって、ネットワークはむしろ「そうかもしれない」何かである。あえていえば、この言葉を全く使わなくても、別の何かの言葉で代用できる。それで特に大きな支障はないように思える。

それでも私たちは「ネットワーク」という言葉を使ってしまう。例えば研究プロジェクトの補助金の申請書に、「〇〇の研究者とのネットワークを構築し」といった文言をついてしまう。「協力」とも「連携」とも、あるいは「共同」とも書きあぐねて。そうした明確な性格づけをあたえたくないとき、あたえるのがはばかれるとき、つい使ってしまう。

便利な決まり文句 (cliché) だと割り切ればすむのかもしれない。たしかにそういう面もあるが、そう言い切ってしまうことにも私は抵抗がある。それはたぶん、この言葉を最初に聞いたとき、あるいは最初に使いたくなかったとき、自分を通り抜けていった風のような爽やかさを憶えているからだと思う。何かが開かれていく。新しい世界への扉をみつけた。そんな感じがした。

この言葉をつい使ってしまう人には、多かれ少なかれ、同じような記憶や経験があるのではないだろうか。それが、手垢のついた形容となった今も、ただ「そうかもしれない」ものでありながらも、この言葉を使わせてしまうのではないだろうか。

私たちは言葉を通じて社会を見る。言葉を通じて社会を知る。

現在の社会科学は以前よりはるかに多く、数理的な手法やモデルを使うようになっていく。それらの手段を通じて考えることも少なくない。けれども、それでも最終的に世界に出会う通路になるのは、その最初の手触りを教えてくれるのは、今でもやはり言葉だと思う。

だとすれば、その最初の瞬間を、手触りを大事にしたい。むしろ「ネットワーク」が新鮮な流行語ではない今だからこそ、あらためて思い起こし、もう一度蘇らせてみたい。そんな風に考えたのは、この地球上の現実の世界が見せている様相とももちろん無縁ではない。

T・ピケティをはじめ、何人もがすでに指摘しているように、第二次大戦後の、着実に経済成長できた時代は終わりつつある。人類の歴史上ではいうまでもなく、19世紀以降

の近代産業社会のなかでも、この時代はむしろ特異な時間であった。誰もがいつかは豊かになれる、もっと自由になれる。素朴にそう信じられたし、そう信じられることを自明の前提にできた。

そうした時代が終わりつつある。かつての経済成長の夢を語る経済学者は今も少なくなく、その処方箋を高値で売りつける政治家もまた少なくないが、現在にいたるまで、それらの「実験」は失敗に終わっている。終わりを緩やかに引き伸ばしたり、乱暴に先送りしたりはできても、局面を打開するほどの成果はあがっていない。

「リベラリズムの退潮」と呼ばれる事象も、おそらくそれと関連しているのだろう。自分も他人もより豊かでより自由になれると思えるときに、他人の自由や豊かさを尊重できるかどうかと、そう思えないときにもなおそれらを尊重できるかどうかは、全くちがう。そのちがいを無視して、思想の衰退を嘆いたり、「大衆の愚かさ」を非難したりするのは、たんなる回顧にすぎない。「勝ち逃げできそうな人たちの言い草だよ」の一言で、最後は片付けられてしまう。

それでもやはり、世界に垣根は少ない方がよい。衝突をせず、奪わず、そして奪われずに生きていければ、その方がよい。もし本当にそう考えるのであれば、努力するしかないのだろう。例えば、言葉を使って社会に見て、知るなかで、より自由に、より豊かに暮らせる可能性を探ることで。

夢を語れる時代に夢を語るのはたやすいが、夢を語りにくい時代に夢を抱くためには、強靱な想像力と思考を必要とする。単純化して押し潰してしまう方がはるかに簡単だ。けれども、だからこそ、考えることの意義が本当に試されるのではないだろうか。

「ネットワーク」の可能性を今、考えてみるというのは、そういう作業なのだと思う。たとえそれが、どれほどささやかな試みであるとしても。